

詩篇 122 篇 「エルサレムの平和」

1A 族長時代

1B メルキゼデク

2B イサクのいけにえ

2A 王国時代

1B ダビデの町

2B 神殿建設

3A 捕囚時代

1B 離散

2B 再建

4A 新約時代

1B イエスの宮参り

2B 十字架・復活・昇天

5A 使徒時代

6A キリストの再臨

1B 荒らす憎むべき者

2B ハルマゲドン

3B 千年王国

7A 新天新地

本文

おはようございます。私たちは無事にイスラエルの旅を終えることができました。私がどのようにして、受けた恵みを言い表せばよいのか悩みますが、詩篇 65 篇 11 節を思い出しました。「**あなたは、その年に、御恵みの冠をかぶらせ、あなたの通られた跡にはあぶらがしたたっています。**」油のしたたる恵みです。午後に詳しいことは分かち合いたいと思いますが、主が私たちを恵まれるために、油をイスラエルの地にしたたせ、という思いでした。イスラエルは冬季なので、雨がよく降りますが、驚くことに私たちの行く道を主が開かれるように、私たちの行くところでは一日も雨が降りませんでした。そして、そこは花が咲き乱れています。

今朝は、いま詩篇を朗読しましたように、エルサレムの平和について語りたいと思います。エルサレムは聖書に 811 回出てきます。その町の意味は、「神の平和」です。けれども、旅行をすればよく分かるように、そこは平和とは程遠い歴史を辿りました。確かに今もよく整えられた町なのですが、聖書時代の町を知るには十数メートル掘らなければいけません。それは、時代によってできた層です。敵がその町を打ち壊し、その瓦礫を地ならしして新たな町を建てます。そして他の敵がやってきてさらにまた新たな町をその上に建てます。そのようにして、地層のように各時代の町が積

みあがっています。それは、平和ではなく戦争の痕跡です。しかし、神はそれでもここを「神の平和」という名を付けたいと願われました。

それは、エルサレムは私たちの平和を表しているからです。私たち個々人の心の平安、また私たちの間にある平和を表しているに他なりません。神は人を平和で見たし、繁栄を与えたいと願っておられます。けれども、そこから離れているという人の現状があります。けれどもなおこと、神はご自分の平和で私たちを支配したいと熱情をもって願っておられます。今朝は、聖書の初めから終わりに至るエルサレムに対する神の御心を眺めてみたいと思います。

1A 族長時代

初めは、アブラハム、イサク、ヤコブの族長時代におけるエルサレムです。

1B メルキゼデク

創世記 14 章を開いてください、18 節からお読みします。エルサレムについて一番目に言えることは、「義と平和の王が出てきたところ」であります。「また、**シャレムの王メルキゼデクはパンとぶどう酒を持って来た。彼はいと高き神の祭司であった。彼はアブラムを祝福して言った。「祝福を受けよ。アブラム。天と地を造られた方、いと高き神より。あなたの手に、あなたの敵を渡されたいと高き神に、誉れあれ。」アブラムはすべての物の十分の一を彼に与えた。(18-20 節)**」アブラハムが、ソドムにいたロトをさらった王たちを追跡し、彼とすべて財産を取り戻し、ロトとその家族や財産をすべて取り返しました。その時に、シャレム王がやってきました。「**シャレム**」とはエルサレムのことであり、「平和」の意味です。そして「**メルキゼデク**」は「義の王」という意味です。平和の町から来た義の王が、アブラハムを祝福しました。彼は王であると同時に祭司でありました。

エルサレムからは、平和と義の王、そして私たちを祝福するいと高き神の祭司がやってきます。この方はイエス・キリストです。私たちが平和を持つためには、その祝福を得るためには、この方の義を受け入れなければいけません。正義のない平和はありえません。自分たちの仲間の輪を保てば平和になるのだ、そこで正義を求める必要はないのだ、正義を求めるから争うのだ、などと考える人がたくさんいます。果たしてそうでしょうか？天国と地獄の喩えで、ごちそうと長い箸を持っている人々の話があります。地獄では、そのごちそうを自分が食べようとしています、箸が長すぎるので食べ物を口に持っていきることができません。ごちそうを目の前にして飢えて死んでしまいます。天国も同じ長い箸を使っています。けれども、互いにその箸を相手が食べるために使います。こうして調和が保てるのです。自分よりも相手を尊ぶという正義があるから、平和でいることができます。そして、そこに祝福があります。

2B イサクのいけにえ

そしてエルサレムについて第二に言えることは、そこでアブラハムがイサクを捧げようとしたことです。創世記 22 章 2 節です。「**神は仰せられた。「あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサク**

を連れて、モリヤの地に行きなさい。そしてわたしがあなたに示す一つの山の上で、全焼のいけにえとしてイサクをわたしにささげなさい。」アブラハムに神が示されたのは、贖罪です。自分の独り子を捧げることによって、罪の赦しを与えようとおられることです。これをエルサレムのモリヤの山、後の神殿の丘になるところでそれを行なえと命じられました。もちろんこれは、父なる神ご自身が、ご自身の子イエス・キリストによって成すことを予めアブラハムに示されたのです。イサクが自分でいけにえのための薪を担いだように、十字架の木を背負い、カルバリの丘まで歩いていかれました。

平和が自分に与えられるためには、自分のうちにある罪が取り除かれなければいけません。罪が取り除かれなければ、神との平和がありません。神との平和がなければ、心の内の平安もなく、また他の人間との平和もありえません。エルサレムにおいて、神が罪の贖いを行なわれました。

2A 王国時代

エルサレムは、当時エモリ人が住んでいました。ヨシュアが約束の地に入ってから、彼らはそこを攻め取ることをしませんでした(士師 15:62)。けれどもダビデが攻め取りました。

1B ダビデの町

サムエル記第二 5章 6-10節です。「王とその部下がエルサレムに来て、その地の住民エブス人のところに行ったとき、彼らはダビデに言った。「あなたはここに来ることはできない。めしいや足なえでさえ、あなたを追い出せる。」彼らは、ダビデがここに来ることができない、と考えていたからであった。しかし、ダビデはシオンの要害を攻め取った。これが、ダビデの町である。その日ダビデは、「だれでもエブス人を打とうとする者は、水汲みの地下道を抜けて、ダビデが憎む足なえとめしいを打て。」と言った。このため、「めしいや足なえは宮にはいってはならない。」と言われている。こうしてダビデはこの要害を住まいとして、これをダビデの町と呼んだ。ダビデはミロから内側にかけて、回りに城壁を建てた。ダビデはますます大いなる者となり、万軍の神、主が彼とともにおられた。」

神は、ダビデの王座によってエルサレムを永遠の都にすることをお決めになりました。ダビデの座から代々の王がここから治めましたが、究極的にはダビデの子キリストがここから世界を、平和をもって治められます(イザヤ 9:6-7)。ですからエルサレムについての第三番目のことは、ダビデの座が永遠に続くところ、そして平和が世界に及ぶところだと言えます。

2B 神殿建設

そしてダビデは、エルサレムを自分の町とした後に神の箱を運びました。天幕にその契約の箱を安置しましたが、彼は主の家を建てたいという強い情熱を抱きました。彼は、主を礼拝することを強い情熱として抱いていました。エルサレムは礼拝の場となったのです。

その幻を実現したのは、ソロモンです。彼の名はそのまま「平和」から来ています。彼は七年かけて、エルサレムに神殿を建てました。そして建てた後の奉獻式において彼は長い祈りを捧げました。彼が捧げた祈りは、この神殿の中に主が住むことではありませんでした。主の住まいは天であり、地はその足台であると祈りました。ではなぜそこに神殿を建てたのか？神殿に向かって祈るときに、その祈りを聞いてくださり罪を赦してください、と祈っているのです。「あなたのしもべとあなたの民イスラエルが、この所に向かってささげる願いを聞いてください。あなたご自身が、あなたのお住まいになる所、天にいまして、これを聞いてください。聞いて、お赦してください。(1列王 8:30)」

私たちは主を礼拝することによって、初めて平和を持つことができます。そして礼拝は、罪の赦しを願うところから始まります。自分のいたらなさ、自分の罪深さを自覚して、それを赦していただきたいと願い出るところから始まるのです。ですからエルサレムについての四番目のことは、礼拝をし、罪の赦しを得るところ、だと言えます。

3A 捕囚時代

そしてエルサレムは王国時代から、捕囚時代に入ります。

1B 離散

エルサレムは約四百年間、ダビデの代々の王が治めるところとなりました。けれども、彼らがダビデのように歩まなかったため、ついにバビロンによって捕え移されました。最後の王ゼデキヤは、バビロンに包囲された隙間を狙って逃げましたが、エリコにおいて捕えられ、彼は息子たちを自分の目の前で虐殺されるのを見、それから目を抉り出されて捕え移されました。ここからエルサレムについて五番目に分かることがあります。それは、「主が裁かれるところ」です。私たちがいつまでも頑なに神の意志を拒むのであれば、いつまでも神に敵対しているのであれば、神はその反逆者をご自分の栄誉のため、取り除かなければいけません。

2B 再建

そして主は、バビロンがペルシヤによって滅ぶようにさせ、ペルシヤの初代王クロスが捕囚のユダヤ人を祖国に帰還させるようにさせました。そして異教徒であるクロスが、彼らにエルサレムで神殿を再建するように命令を出しました。総督ゼルバベルと大祭司ヨシュアの指揮によって、神殿が建ち、そこで学者エズラが律法を教えました。その後、エルサレムの城壁をネヘミヤの指導によって建て直します。

ここから分かる第六の事は、主は私たちの内に平和を建て直してくださる、ということです。たとえ罪を犯して主に罰せられたとしても、主はそのまま私たちを捨て置かれることはありません。私たちが悔い改めるならば、主は必ず私たちをキリストにあって建て直して下さいます。ネヘミヤの時代、城壁を建て直すことは大変なことでした。周囲の住民の執拗な妨害と攻撃に遭いました。けれども、それでもすばやく建て直すことができたのです。私たちにも多くの敵がいます。けれども、

主はご自分のみこころを、志を持った者たちの働きによってすみやかに成し遂げてくださいます。

4A 新約時代

再建のエルサレムは、大きな試練を受けます。ペルシヤ時代の後、ギリシヤ時代に入り、そこから出た王アンティオコス・エピファネスによって、徹底的なユダヤ教の破壊を行ないました。神殿の中にゼウス神を置き、祭壇には豚を捧げることを強要するという始末でした。そこでマカバイ家の勇士が立ち上がります。そして神殿を奪還し、そこを清める儀式を行いました。その時から、マカバイ家の子孫がユダヤを治めるハスモン朝が始まりました。

けれどもハスモン朝も墮落が始まりました。その間に、エドム人の末裔であるイドマヤ人は、ハスモン朝の王によって、ユダヤ教に改宗させられていました。その中の一人がヘロデです。ギリシヤが力を失い、ローマが力を得てくると、ヘロデはそこでローマに媚びることによって力を得て、ついにユダヤ人の王としての地位をローマから得ることになります。そしてヘロデ大王は、ユダヤ人の神殿を大改築します。新約時代、イエス様がお生まれになった時の神殿は、ヘロデによって建てられた神殿です。

1B イエスの宮参り

そこでエルサレムについて言える第七のことは、私たちの主イエスが、ユダヤ人として宮で礼拝をされたところだ、ということです。主がお生まれになって、不浄の期間が終わってからその子を主に捧げるために、ヨセフとマリヤはエルサレムにきています。そこで預言者シメオンとアンナがこの子について預言しました。両親は律法を守り行い、過越などイスラエルの祭りの時には必ず、エルサレムに上られました。少年イエスが十二歳であられたとき、エルサレムで教師たちと議論をしておられました。

ヨハネの福音書は、注意深く、祭りに参加するためにエルサレムに上られるイエスの姿を書き記しています。このようにして、イエスは律法の下に生きられました。エルサレムについて知ることのできる第七のことは、「主が人の姿を取られたところ」ということです。「しかし定めの時が来たので、神はご自分の御子を遣わし、この方を、女から生まれた者、また律法の下にある者となさいました。これは律法の下にある者を贖い出すためで、その結果、私たちが子としての身分を受けようになるためです。(ガラテヤ 4:4-5)」イエス様は、命令だけされて、その重荷に何一つ触れないような教師ではありませんでした。ご自身が人々の置かれている頸木を負われて、人々と一つになることによって、その縄目から解放してくださったのです。ですから、エルサレムを思うとき、私たちはへりくだった主の姿を思います。そして私たちの生活と一つになってくださり、そこにある重荷を軽くしてくださる主権者であることを思うことができるのです。

2B 十字架・復活・昇天

そしてエルサレムについて言える第八のことは、私たちの主が、十字架で死に、よみがえり、そ

して天に昇られたところ、であります。アブラハムの時代から、エルサレムにて神はこのことを示しておられました。イエスが私たちの罪のために死に、そして私たちを義と認めるためによみがえってくださいました。そして天に昇られて、父なる神の右に座しておられるのです。イザヤ書 40 章の一部を読みます。「エルサレムに優しく語りかけよ。これに呼びかけよ。その労苦は終わり、その咎は償われた。そのすべての罪に引き替え、二倍のものを主の手から受けたと。(2 節)」「シオンに良い知らせを伝える者よ。高い山に登れ。エルサレムに良い知らせを伝える者よ。力の限り声をあげよ。声をあげよ。恐れるな。ユダの町々に言え。「見よ。あなたがたの神を。」見よ。神である主は力をもって来られ、その御腕で統べ治める。見よ。その報いは主とともにあり、その報酬は主の前にある。主は羊飼いのように、その群れを飼い、御腕に子羊を引き寄せ、ふところに抱き、乳を飲ませる羊を優しく導く。(9-11 節)」イエスが罪のために死に、よみがえられ、そして天に昇られたという良い知らせは、私たちの労苦を終わらせます。慰めを与えます。そしてこの平和が、エルサレムから宣べ伝えられるのです。

5A 使徒時代

そこでエルサレムについて言える第九のことは、使徒たちが聖霊を受け、教会が始まったところです。平和の福音がエルサレムから伝えられる時に、使徒たちはエルサレムに集まっていました。その屋上の間で祈っていると、聖霊が火のように降りてきてくださり、それぞれが異なる言語で神を賛美し始めました。この徴をもって、ペテロは力強く世界から祭りを守るために集まってきたユダヤ人たちに、イエスを言い伝えました。そこで罪を悔い改めてバプテスマを受けた男は三千人いたのです。ここで教会が始まりました。

私たちはエルサレムを思うときに、聖霊の力を受けるところ。そして教会が堅く建てられて、主のみことばを言い広めるために遣わされるところなのだ、と思うことができるのです。

6A キリストの再臨

私たちは今、この教会時代にいます。使徒たちは常に、へりくだってキリストの到来を待ち望んでいました。この悪い世は滅びるが、主が万物を建て直してくださると信じていました。キリストが戻って来られることによって、キリストの平和が世界に及ぶことを堅く信じていました。

1B 荒らす憎むべき者

しかし、使徒たちは、キリストの到来の前に偽りがはびこることを、主ご自身から教えられていました。ご自身が戻って来られる前に、福音を拒む者たちが裁かれるために、偽りを信じるようにされることを警告しておられました。そこでエルサレムについて覚える第十のことは、偽キリストが一時の間、忌むべきことを行ない、荒らすところだ、ということです。「それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす憎むべき者』が、聖なる所に立つのを見たならば、(読者はよく読み取るように。)そのときは、ユダヤにいる人々は山へ逃げなさい。(マタイ 24:15-16)」

私たちは世の終わりに生きています。正しいとされることが悪とみなされ、悪が正しいとされる時代に生きています。多くの偽りと惑わしがはびこる時に生きています。「平和だ、安全だ」と言っているその言葉は偽の平和であることを悟らなければいけません。

2B ハルマゲドン

そしてエルサレムについて言える十一番目の出来事は、ハルマゲドンです。全世界の軍隊が、イスラエルのメギドの丘、ハルマゲドンに集まります。国々は互いに敵対し合っていますが、神とキリストに対して対抗することについては、一つになることができます。相集まって戦うためにイスラエルに来るのです。そしてあらゆる国々は、エルサレムを攻めます。エルサレムの住民は全滅の危機に襲われます。しかし、その時にイエスが天から到来します。そして世界の軍隊に対して戦われるのです。敵どもは、生きたまま滅んでいきます。「主は、エルサレムを攻めに来るすべての国々の民にこの災害を加えられる。彼らの肉をまだ足で立っているうちに腐らせる。彼らの目はまぶたの中で腐り、彼らの舌は口の中で腐る。(ゼカリヤ 14:12)」

ハルマゲドンの預言を考える時、私たちは「悪によって一致しない」という教訓を学ぶべきです。総督ピラトとヘロデは敵対していましたが、イエスの十字架刑について仲良くなりました。人が悪いことで、敵対することで一致してもそれは、神の容赦ない裁きの中に入るのだということを知らなければいけません。

3B 千年王国

そして主が地上をエルサレムから治められます。この期間が千年間続きます。そこでエルサレムについて言える第十二番目のことは、主の教えと裁きです。イザヤ書 2 章 2 節から読みます。「終わりの日に、主の家の山は、山々の頂に堅く立ち、丘々よりもそびえ立ち、すべての国々がそこに流れて来る。多くの民が来て言う。「さあ、主の山、ヤコブの神の家に上ろう。主はご自分の道を、私たちに教えてください。私たちはその小道を歩もう。」それは、シオンからみおしえが出、エルサレムから主のことばが出るからだ。主は国々の間をさばき、多くの国々の民に、判決を下す。彼らはその剣を鋤に、その槍をかまに打ち直し、国は国に向かって剣を上げず、二度と戦いのことを習わない。(2-4 節)」主が教えをエルサレムから行なわれます。それを全世界の民が来て、聞きに来ます。それから、主はエルサレムから裁きを行なわれます。その正義によって、国と国はもはや戦うことをやめるのです。平和を考える時、私たちはニューヨークにある国連本部からスタートするのではないことを知るべきです。エルサレムにおられるキリストからスタートすることを知るべきです。

7A 新天新地

そして千年間の統治は、神の大いなる裁きによって終わります。そして今の天地は過ぎ去り、まったく新しい天と地がやって来ます。それは、「天からのエルサレム」と呼ばれています。そこでエルサレムについていえる、十三番目のこと、最後のことは、「すべての信者が集まるところ」です。

「私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来るのを見た。(黙示 21:2)」ここに信者たちが住むようになります。ここでは死も、涙も、悲しみも、嘆きも、苦しみもありません。すべてが新しくなります。そして太陽や月もありません。父なる神と子なるキリストがそこに住まわれて、その栄光で輝いているからです。

最後にヘブル 12 章を開いてください。「しかし、あなたがたは、シオンの山、生ける神の都、天にあるエルサレム、無数の御使いたちの大祝会に近づいているのです。また、天に登録されている長子たちの教会、万民の審判者である神、全うされた義人たちの霊、さらに、新しい契約の仲介者イエス、それに、アベルの血よりもすぐれたことを語る注ぎかけの血に近づいています。(12:22-24)」エルサレムについて初めに啓示を受けたアブラハムは、その地上のエルサレムのみならず、この天の故郷をあこがれていました。私たちがエルサレムを思うときに、長子たちの教会、すべての義人たちの霊、そして何よりも、新しい契約と、キリストご自身が流された血を思うのです。

エルサレムは、天を表しています。究極の天を表しています。そして究極の天とは、小羊なるイエス、血を流して、私たちと神を隔てる罪をすべて除き去ったその仲介が中心にあります。ここに私たちは究極に平和、神と万物との和解を見るのです。